

小説中の白蓮教形象初探

—『七曜平妖傳』を通して

千賀 由佳

はじめに

明末はさまざまな名を冠する民間宗教が乱立する時代であった。なかでも『明實録』万暦四十三年六月庚子條に、涅槃教・紅封教・老子教といった教門について「皆白蓮の名を諱みて、實は白蓮の教を演ず（皆諱白蓮之名、實演白蓮之教）」、同じく万暦四十七年四月戊寅條に「臣思うに邪教は多端なれども白蓮を以て領袖と為す（臣思邪教多端、以白蓮為領袖）」とあるように、白蓮教はその代表的な存在であり、個々の教門の内実はどれも白蓮教に等しいとさえ考えられていた¹。従って当時の一部の文学作品も白蓮教からの直接また間接の影響を免れ得ず、こうした作品を民間宗教研究の新たな題材として見いだす論考が近年現れつつあるが²、その虚構とし

1 白蓮教を論じた近年の論著には浅井紀『明清時代民間宗教結社の研究』（研文出版、1990）や馬西沙『中国民間宗教史』（上海人民出版社、1992）等がある。前者は「私見では、白蓮教という名称がふさわしいのは、元末から明初にかけて存在した、弥勒仏下生を唱えた民間宗教結社である。」として、明末から清代にかけて成立した「主として羅教の教義と弥勒下生信仰とが混淆して形成された」民間宗教と同一視することに慎重な態度を取る（4・5頁）。いっぽう後者は白蓮教の教義を弥陀信仰に置き、明末まで一貫して弥勒教とは区別して論じる（第四章）。白蓮教の定義はこのように一筋縄ではない。本稿では当時の人々が抱いたイメージの集合体としての白蓮教に焦点をあてるため、当時それが「白蓮教」として見られていたか、具体的には史料中に「白蓮教」の文字があるかを主な拠り所とした。なお清代に至っても白蓮教の流れを汲む教門の反乱は度々起こっているが、その詳細については嘉慶年間の八卦教乱を論じた Susan Naquin, *Millenarian rebellion in China: the Eight Trigrams uprising of 1813*, New Haven: Yale University Press, 1976. など参照。

2 孫遜・周君文「古代小説中の民間宗教及其認識価値 — 以白蓮教、八卦教為主要考察対象」（『文学遺産』2005年第五期）、万晴川『中国古代小説与民間宗教及帮会之關係研究』（人民文学出版社、2010）など。

ての膨らみについてはなお研究の余地がある。すなわち、歴史的事件の見聞や伝承を通じて人々の間で共有された白蓮教という存在が、小説の中でどのような形象をとって表れているか、その全体像を把握するために、まずは個々の作品に即してその過程と発展を明らかにするのが本稿の目的である。

明の天啓年間に執筆された長編白話小説である清隱道士『七曜平妖傳』は、白蓮教と関連づけられる徐鴻儒（小説中では同音の「徐洪儒」と表記される）の乱を主題とし、刊行より僅か二年前の事件を扱う時事小説であると同時に、荒唐無稽な妖術合戦が繰り広げられる神怪小説としての面も持っている。本稿ではこの作品の内容と成立背景を概観したうえで、「妖術」、「女性人物」、そして「集会と不義密通」の三点を取り上げ、先行作品である『三遂平妖傳』や民間宗教を描く同時代の小説の例と対照しながら、作品中の白蓮教形象がいかに成立したかを探る。

一、『七曜平妖傳』の内容と成立背景

『七曜平妖傳』は別名『皇明通俗演義七曜平妖全傳』ともいう。『古本小説集成』には現時点で唯一、六卷七十二回のほぼ全文（一部缺頁あり）を参照することが可能な版本である、封面佚、序文・目録・図十二葉付きの鄭振鐸旧蔵本の影印が収録されている。同版本は北方異民族の蔑称を削った跡があることから明刊清修版とみられ、現在は北京図書館に所蔵されている。孫楷第『中國通俗小説書目』は『平妖全傳』と題して卷二から卷五の六十回までの残本である馬隅卿旧蔵明本を著録しているが、これを含めて存在が取り沙汰されている他の版本はいずれも所在不明である³。題名のよく似た馮夢龍『三遂平妖傳』は泰昌元年の序を附して刊行された、全

3 大塚秀高『増補中國通俗小説書目』（汲古書院、1987）246頁は、鄭振鐸旧蔵本と馬廉（隅卿）旧蔵本のほか、傳惜華旧蔵の本衙蔵板を著録しているが、その書誌情報は「全像七曜演義、清隱居士編次」「平妖伝」「本衙蔵板」と記してある封面が存する以外は鄭振鐸旧蔵本と同じである。なお同書には鄭振鐸旧蔵本「図八葉」とあるが、『古本小説集成』所収版本が実際に含む図は六葉（各々の版心に「像一」から「像七」とある。但し「像四」を欠く）。

四十回の白話小説である。(これは羅漢中の作といわれる全二十回の同名の小説に基づくが、本稿では四十回本を念頭に置く。)『三遂平妖伝』は妖術合戦を交えつつ反乱事件を描くなど内容的にも『七曜平妖傳』と重なるところがある。前述の『古本小説集成』所収版本の巻首題が『新編皇明通俗演義七曜平妖後全卷之一』となっていること、また巻二および巻六の巻尾題が「平妖 傳」と明らかに一文字分の空白を含んでいることは、もとは「平妖後傳」であった題名を「平妖全傳」と修正しようとして、改めるべき字を間違えた、あるいは字を削りはしたが新たに入れ直すのを失念した結果と考えられ⁴、これも『七曜平妖傳』が『三遂平妖傳』の続作であるという根拠になりうる。

『七曜平妖傳』の編者として、巻首には「呉興會極清隱道士編次／洪都瀛海嬾仙居士參閱／彭城雙龍延平處士訂証」とある。前述の序文は「友人文光斗」が天啓甲子（四年）春に執筆し「平妖全傳序」と題したものであるが、そこでは作者である清隱道士は呉興の人で名を沈會極といい、淮南の太史沈十洲の孫であると言う⁵。ただしその素性については、江湖を流浪し百家の思想と性命学に通じた人物と述べるにとどまっており⁶、この表現から彼は博学ながら官職には就かなかったと推察される。沈會極に関するこれ以上の記録は管見では残っていないが、祖父とされる沈十洲、本名沈坤については少なくない記録が残っている。古くは『萬曆淮安府志』の秩官表・嘉靖辛丑（二十年）に「沈坤、殿試第一名国士監祭酒」と記録され、『乾隆江南通志』巻百四十三の伝には詳しい事蹟が見える。曰く沈坤は大河衛の人で、嘉靖辛丑に廷試第一位となり、南京国士監祭酒に任ぜられた。母の喪中、淮安に倭寇の侵入があり、郷兵を集め自らこれを率いて大勝し「状元兵」と呼ばれた。北京国士監祭酒に推薦されるが、人に憎まれて投獄され、そのまま亡くなったという⁷。光緒十年序『淮安府志』巻二十八にある沈坤

4 『古本小説集成』所収『七曜平妖傳』に附された張麗娟による「前言」参照。

5 「會極、吳興氏、為淮南十洲沈太史公孫。」

6 「浪遊湖海、笑傲乾坤、筭百家于内、會性命于中、物外人也。」

7 「沈坤、大河衛人。嘉靖辛丑廷試第一、歷南祭酒。以母喪歸、時倭寇數千犯淮。坤散財贍募士、親當矢石、力戰敗之。淮人呼為狀元兵。起北祭酒、為忌者所中、下獄卒。弟

の伝には上の内容のほか、字を伯生、號を十洲といったこと、彼を陥れたのは給事中の胡應嘉で、巡按御史の林潤による弾劾を経て投獄されたこと等が記されている。また逮捕から獄中死までの経緯は『明史』卷二百十「林潤傳」や『明實錄』嘉靖三十九年三月條にも見える。さらに、同じ淮安出身で沈坤の府学の同窓でもある文人呉承恩は、七言律詩「贈沈十洲」や「贈翰林院修撰儒林郎沈公合公墓誌銘」を残している。これは沈坤の両親、すなわち沈會極の曾祖父母の墓誌銘で、その記述から沈坤が南京国子監祭酒を拝したのが嘉靖甲寅（三十三年）で、母を亡くしたのはその二年後であることなどが分かる（父の沈煒は嘉靖丁亥（六年）没）。特に注目すべきは沈煒の子孫の名が示されている部分で、息子は長子の沈坤を含めて二人、娘二人、男孫三人、女孫三人、曾孫三人の名が記される⁸。序文の記述を信じるならば、ここに出てくる男孫の兆車、兆年、兆安のいずれかが沈會極の父であることはほぼ間違いないと考えられ、さらに曾孫の汾庚、汾甲、汾辛のいずれかが沈會極その人である可能性もある。しかしながら墓誌銘が作られた嘉靖丙辰（三十五年）は『七曜平妖傳』の成立した天啓四年より六十八年も前であるので、葉德均も推測するように、沈會極の出生は墓誌銘が作られたのより後であり、ここに名前は残らなかったとも考えられる⁹。

続いて『七曜平妖傳』の筋書きを簡単に説明する。万曆帝が崩御し、天啓帝の即位と后選びが行なわれたばかりの天啓二年五月、かねてから天に妖星が現れたことから予言されていたように、山東地方で大規模な反乱が起こる。それは豊県の民である徐洪儒が白蓮教主沈晦らに帝王として見いだされ、周臣という白蓮道人が開いた集会をきっかけとする蜂起に便乗し

坊郡諸生有文行。」

8 「生子男二、祭酒坤為長、娶趙氏、封安人。次坊、郡學生、娶宋氏。女二、長德容、適刑科張都給事中侃。次德真、適太學生陸鈞。孫男二、兆車娶馬氏、兆年娶朱氏、俱郡學生。兆安聘葉氏。女孫三、一適邑學生周學禮、其二許聘蔡直臣、張棹。曾孫男三、汾庚聘陸氏、汾甲聘金氏、汾辛聘張氏。」ここで「孫男二」と記した後に三人の名を並べているのは矛盾しているが、ひとまず三人とも男孫であると解釈する。

9 「假定庚等三人彼時約十歳（已聘）、至天啓四年撰小説時、已是七十餘歳之老翁、恐怕無此興緻。」葉德均『戲曲小説叢考・下冊』（中華書局、1979）、603・604頁参照。

て起こしたものであった。実はこの白蓮教軍の幹部はみな獣が転生した妖魔であり、北斗七星の化身たる官軍側の將軍たちに鎮圧される運命であった。白蓮教軍は瞬く間に滕・鄒・嶧・費の四県を陥落させ、さらに夏鎮でも食糧輸送船を襲う。これを知った兗州の藩主魯王の奏上により、天啓帝は討伐軍を派遣する（～第二十回）。官軍が奪われた城を恢復するため奮闘する中、白蓮教軍は兗州と徐州に幾度も侵攻し、附近の鄆城や曲阜でも騒ぎを起こす。官軍側の將軍である許定國は陣中で白蓮教の女將裴月娥から求婚されてこれを妻としたが、この裴月娥や官軍の老参謀である胡鶴齡は卓越した妖術により官軍を優勢に導いたので、魯王はひとまず彼らに褒美を与えて兵を労うとともに、七月望日の孟蘭盆会に合わせて兗州戦で犠牲になった孤魂を祀る（～第四十五回）。兗州・徐州への侵攻はなおも繰り返され、戦いはますます熾烈な妖術合戦の様相を帯びていく。白蓮教の女將周如玉は許定國の妻となり、裴月娥と協力して沈晦の妖術を破り生け捕りにするが、いっぽうで胡鶴齡は毒矢に当たって落命する。官軍は味方を装って鄒県に侵入し、逃げ出した徐洪儒らを遂に追いつめて捕らえる（～第六十七回）。賊軍の生き残りは徐州を目指して逃げていたが、不意に空から関帝が現れて一喝のもとに蹴散らされる。將軍と女將らも余党と戦って勝利し、華々しく帰還して魯王から祝いの酒を賜る。時は十月二十四日であった。のち都へ連行された徐洪儒・沈晦らは陵遲の刑に処され、天啓帝は宴席を設けて功臣を労い、また道士や僧侶に命じて反乱犠牲者の慰霊の祭祀を行なう。かくして王朝の平和が取り戻されたのである（～七十二回）。

小説執筆の経緯について、序文は次のように記す。

白蓮の崇は、中原より起き、心膂の患と為る。……吾が友會極は、其の顛末を目観して突を視し者なり。乃ち之の傳を為し、以て其の治亂の由を紀し、美刺の中に褒貶を寓し、宿を設けて以て崇を滅し、術を用いて以て妖を平らぐ。此れ又た幻を以て幻に易え、假を籍りて真を發するの義なり。¹⁰

10 「白蓮之崇、起自中原、為心膂之患……吾友會極、目觀其顛末而視突者也。乃為之傳、以紀其治亂之由、寓褒貶于美刺之中、設宿以滅崇、用術以平妖。此又以幻易幻、籍假發

つまり沈會極は自身の目撃した実在の事件を作品化したのである。『明史』卷二五七「趙彦傳」によれば、薊州人の王森は妖狐の異香を得て白蓮教を倡え、聞香教主を自称し、その信徒は畿輔、山東、山西、河南、陝西、四川に広がっていた。万暦四十二年、王森は弟子との勢力争いをきっかけに投獄され、五年後に亡くなった。王森の息子好賢や鉅野県の徐鴻儒、武邑県の于弘志が王森の教団を継承し、信徒がますます増加したので、天啓二年の中秋に一斉に挙兵する約束をした。ところが計画が洩れたために、五月に徐鴻儒だけが先に挙兵し、山東の鄆城県、鄒県、滕県、嶧県を立て続けに陥落させた。そこで山東巡撫であった趙彦は都指揮使司の楊国棟と廖棟に命じて兵を發し、さらに大同の総兵官楊肇基を山東総兵官に任じて討伐に当たさせた。賊軍は兗州や曲阜、鄒城を襲うが果たせず、鄆城と嶧県からも退却する。七月に趙彦は自ら出兵し、楊肇基らと図って鄒県を取り囲んだ。徐鴻儒は三ヶ月間城内に立てこもったが、食糧が尽きたため賊軍が投降したとき、一人逃げ出したところを捕えられ、磔刑に処されたという¹¹。

こうした史料中の記録は、『七曜平妖傳』中に記される事件の時期や地域、経過と相当程度合致している。また、小説中に出てくる賊軍側の主要な人物の名には徐洪儒すなわち徐鴻儒をのぞいて史実と一致するものがほとんど見当たらない一方で¹²、事件に関わった実在の役人の名は大量に見受けられる。これらの役人は大きく二分できる。一つは賊軍の攻撃を受けた土地の知府・知県、たとえば鄒県知県蔡可陞、嶧県知県徐弘基、兗州府知府孫朝肅、沛県知県林汝翥、鉅野県知県趙延慶の如きであり、地方志などで実在が確認できたものだけで十名以上を数える。もう一つは討伐において

真之義也。」

11 乱の経過を記録した文書としては、このほか趙彦の報告書『平妖奏議』や後述『平妖集』など多数の史料が残っており、前掲の浅井論著は念入りの史料批判を行ないつつこれらを比較検討し、乱の実態に迫っている。

12 前掲浅井論著 245～247 頁の、反乱に加わった各地の主要人物の表に拠る。なお万晴川論文は、沈晦は沈智、洪流は洪聚をモデルとしているといい（216 頁）、康熙『鄒縣志』卷三「災亂志」には乱の首謀者として徐鴻儒と並んで「蘭陵人沈智」の名が記される。

功績のあった武将であり、特に題名となっている「七曜」、すなわち北斗七星の化身に擬される七人は大きく取り上げられている。以下、彼らについてもう少し詳細な検討を行なう。

小説中の記述によれば、この七人とは北斗七星第一位貪狼星・沂州生員胡鶴齡、第二位巨門星・山東巡撫趙彦、第三位六存星・徐州知州汪心淵、文曲星・兗東道徐從治、第五位廉貞星・中軍都司許定國、武曲星・登州総兵沈有容、破軍星・兗西道閻調羹である¹³。彼らの名はいずれも史書に見ることができるが、事件当時のそれぞれの役職の高低および後世の史書における記述の多寡には些かの開きがある。『明史』に伝の立っている趙・徐・沈、『明史紀事本末』に乱勃発の報告者として記録される閻、『崇禎長編』に「捍禦蓮妖有功」と記される汪に対し、許定國は専ら崇禎年間に起こる李自成の乱以降の事蹟によって名を知られるのみ、胡鶴齡に至ってはわずかに地方志に名が残っているのみである。しかしながらこの七人のうち小説中で最も活躍するのはまさしく許・胡の両名である。まず許定國について、徐鴻儒の乱に関連した記述が見られるのは、管見では『平妖集』と『太康縣志』においてである。『平妖集』は徐鴻儒の乱時代に巡按山東監察御史として趙彦を補佐した王一中の書簡をその子孫がまとめたものであるが、その中に「與許參將」、「答許定國參將」と題した書簡があり、いずれも妖賊の防禦に当たる許の勇略を称賛し鼓舞する内容である¹⁴。また乾隆二十六年序『太康縣志』巻五は国朝の人物として許定國の伝を立て、身長七尺、人なみ優れた膂力で「許千斤」と呼ばれ、行伍から山東遊撃に任ぜられ、白蓮教乱を平定した功績によって副総兵に昇進し、後に高傑を殺して清朝に降り、光祿大夫を授けられた等と記す¹⁵。参將・遊撃はいずれも各拠点に配された総兵の部下にあたり、山東総兵楊肇基の部下として乱鎮

13 七星の順位は小説中で確認できたもののみ記した。なおこのうち「六存星」は本来「祿存星」と表記するべきもののようである。『正統道藏』洞神部所収『太上玄靈北斗本命延生經』など参照。

14 東京大学東洋文化研究所蔵本。

15 故宮珍本叢刊『夏邑縣志・扶溝縣志・太康縣志・重修伊陽縣志』第二冊（海南出版社、2001）、119頁。

庄に活躍したと考えれば筋が通る。許定國は清投降前後の事蹟がよく知られ、孔尚任の伝奇『桃花扇』にも登場する。しかし『七曜平妖傳』中で主要人物とされ、同序でも「許参将糾糾武夫」と乱平定の功績を讃えられていることに鑑みると、徐鴻儒の乱での活躍も当時はそれなりに知られたものだった可能性がある。

いっぽう胡鶴齡については、崇禎元年序『全邊略記』巻十一に「征妖陣亡者五十三人」のうちの一人としてその名が見えることが既に指摘されているが¹⁶、康熙年間の『沂州志』巻六「人物部下」に立てられた胡鶴齡の伝にはさらに詳細な内容が記されている。その内容は以下のようなものである。

胡鶴齡、字は衡霄、庠生。性は英異にして謀略多し。白蓮妖變に値たり、總兵楊肇基旨を奉りて征剿するに、兗東道徐副憲に言ひて、聘して参軍と爲して戎に従はしむ。多く奇績有り、鄒縣岡山に於いて陣亡す。賊平らぎて功を叙し、文林郎を追贈す。廕子靖、百戸を世襲す。¹⁷

小説中の胡鶴齡の設定はこれとほぼ一致するが、より詳細である。すなわち淮安府清江浦で生まれ、沂州に移って州庠文学となり、沂州出身の楊肇基と莫逆の交わりを結び、彼の参謀として討伐軍に参加する。またその先祖は明建国の功臣である胡大海であるとされる。胡鶴齡は天文・地理に深く通じているだけでなく法術をも操る道士的な存在であり、その活躍や、天文によってあらかじめ示された戦死は物語の中で大きな位置を占めている。乱鎮圧の最高責任者であった趙彦を差し置いて、一介の生員に過ぎない胡鶴齡が北斗七星の第一位に据えられたのは、作者が直接または間接的に胡鶴齡を知っていたためではないだろうか。

以上の「七曜」の選定に関しては、史実上でも小説中でも討伐の主力として活躍する山東総兵楊肇基や済寧総河陳道亨が数に入っていないなど、

16 成敏「以神魔寫時事 — 論《七曜平妖全傳》」（『明清小説研究』2006年第一期）注④。

17 「胡鶴齡、字衡霄、庠生、性英異多謀略。值白蓮妖變、總兵楊肇基奉旨征剿、言於兗東道徐副憲、聘爲参軍從戎。多有奇績、於鄒縣岡山陣亡、賊平叙功、追贈文林郎。廕子靖、世襲百戸。」。「性英異」の「異」は「異」のような字だが、仮にこう置いた。東京大学東洋文化研究所蔵『沂州志』（康熙甲寅序）に拠る。なお乾隆庚辰序『沂州府志』にも同様の記述が見えるが、数箇所により語句の削除が見られる。

恣意的な要素も存在する。その一方で明末の社会において北斗星信仰は、たとえば日用類書『萬用正宗』に歩罡履斗の法と呪文が載っているように、日常的かつ通俗化した形で取り入れられていたと考えられ¹⁸、この小説中の設定もその浸透ぶりの一端を示していると言えるかもしれない。

二、妖術と白蓮教

さて、『七曜平妖傳』中で乱を起こした民間宗教は、作中では一貫して「白蓮教」と呼ばれる。先に引用したとおり「趙彦傳」では王森の宗教が「白蓮教」とも「聞香教」とも呼ばれている。このように複数の呼称が並立しているのは『餐微子集』巻四「獲解妖首致京疏」のような王森在世中の調書においても同じである¹⁹。同様に徐鴻儒は『餐微子集』によれば王好賢の弟子であるが²⁰、『明實錄』天啓二年五月丙午條に「山東白蓮妖賊徐鴻儒」とあるように、こちらにもたびたび白蓮教と称される。つまり、王森や徐鴻儒の宗教が正しくはどう呼ばれるべきであるかという問題とは別に²¹、当時の人々が彼らを「白蓮教」と捉えていたという事実があり、『七曜平妖傳』はそうした意識の反映によって生み出された作品にはかならない。そこで以下では三つの観点から作中の「白蓮教」がどのように描かれているかを検討し、その形象がどのように成立したのかを考察したい。第一に、妖術をめぐる記述についてである。

『七曜平妖傳』第七回「造逆妖黨」では白蓮教主の一人である沈晦が次のような術を用いる。

沈晦曰「主公若見疑、晦有寶盆一面、能照前生後世今生、一照便知分曉」、即命高糜取出寶盆一面。…沈道取法水一盆、令洪儒照面、照見

18 小川陽一「明代小説の中の北斗星信仰」（『集刊東洋学』第五十四号、昭和60）参照。

19 「（王森）稱為聞香教主、又創白蓮教、為大乘弘通教即弘封教。」

20 「妖犯王好賢詞連山東・畿南・中州・秦・蜀各妖、勾結六省。而大傳頭徐鴻儒・于弘志等皆身為弟子、尊稱師傅。」

21 李世瑜「順天保明寺考」（『北京史苑』第三輯、1985）によれば、王森はもと西大乘教に属し、のち独立して大乘教すなわち聞香教を開いたという。前掲淺井論著も、徐鴻儒らが大乘興勝という年号を定めていることから大乘教が正式の教名かと論じる。

頭頂平定冠、身穿赭黄袍、腰繫碧玉、帶王者之相。

沈晦は、「主君がお疑いになるなら、私は宝の盆をひとつ持っていて、前生・後世・今生を映し出せるので、一度映せばすぐにお分かりになるでしょう」と言い、すぐに高廩に命じて宝盆を取り出させた。…沈道人が法水を盆に張り、洪儒に顔を映させると、頭には平定冠をかぶり、体には赭黄袍をまとい、腰には碧玉を佩びて、王者の相を具えているのが見えた。

これと同種の術は史書にも記載があり、康熙『鄆城縣志』巻七には徐鴻儒の使う術として記されている²²。時代を遡れば、弥勒仏下生を唱えた正徳年間の李福達もこの水盆の妖術を用いたといわれるが²³、弥勒仏下生信仰は元末以降白蓮教と密接な関わりを有していた。また無為教（後述）の經典である『正信除疑無修証自在寶卷』『拜日月邪法品第十八』は、「白縛」すなわち白蓮教が「邪水照着公侯伯（邪水で公侯伯を映し出す）」という術を用いるとして批判している。さらに第十三回「急變白蓮」と第十四回「白蓮據滕」には、徐洪儒らが隊伍の兵や生け捕りにした壮者に薬水を飲ませて従わせる場面があるが、『明實録』天啓二年五月丙午條に徐鴻儒が入教者に迷薬を飲ませたという記載が見える²⁴。このように、『七曜平妖傳』に出てくる白蓮教の妖術には、史書の記述と一致するものが複数含まれている²⁵。なお水盆の中で人の姿が変化する話は、『三遂平妖傳』第三十二回の王則、『水滸傳』第百十回の方臘など、ほかの白話小説作品にも例が見られ、いずれも反乱の起こるきっかけとなっている。

22 「鉅野聞香教首徐鴻儒、以妖術煽衆、設水盆照人頭面、使各自見其為帝王將相衣冠、惑而從者數萬人。」内閣文庫蔵、康熙五十五年序刊本。

23 『罪惟録』列伝卷三十一李福達條「注水一盆、引男女自照、得諸冠服狀不等、遂以為某當文武将相、某當后妃夫人。」

24 「鴻儒鉅野人、以左道聚衆、入教者飲以迷薬、妄言生當為帝為王、死當證佛作祖、轉相煽惑。」

25 白蓮教や徐鴻儒をめぐる妖術が史書に記載されたその他の例については、野口鐵郎『明代白蓮教史の研究』（雄山閣、1986）第三編第一章「白蓮教の教理的展開と「術」」や佐藤公彦「明末の聞香教と徐鴻儒反乱・私考」（『老百姓の世界』第一号、1983）38頁参照。

以上の妖術は主に聚衆のために行なわれるものであるが、このほか『七曜平妖傳』には戦いのための妖術が大量に登場する。たとえば沈晦ら三教主をはじめとする白蓮道人は官軍との戦闘で強風を呼んで天地を暗くするなどの術を用い、それを迎え撃つ官軍の胡鶴齡も法術を操って応戦する。こうした妖術からは先行する白話小説作品からの影響を見てとることができ²⁶、特に『三遂平妖傳』の影響が大きい。前述のように『三遂平妖傳』は北宋に起こった王則の乱の顛末を描いた小説であるが、その中では王則軍に味方する聖姑姑という狐の精やその弟子が呪文で風雨を呼んだり、多くの獣を現出したりという妖術を操って官軍と戦い、官軍のほうでも獣の血で敵の妖術を無力化して対抗する。それとよく似た描写が『七曜平妖傳』にも現れている。また『三遂平妖傳』中に表れる妖術には道教の符籙派からの影響が見受けられるというが²⁷、『七曜平妖傳』にも符籙の使用が描かれる。たとえば第三十九回で胡鶴齡が符を用いて白蓮道人嵇光先の妖術に対抗する場面などがそうである。しかも全体に占める妖術合戦の割合でいえば、『七曜平妖傳』は『三遂平妖傳』を更に上回っている。これは物語の構造に由来するものでもあり、『三遂平妖傳』では王則による最初の挙兵が行なわれるのが全四十回中第三十一回であるのに対し、『七曜平妖傳』では全七十二回中第十三回に最初の挙兵があつて、以降ほとんど最後まで、官軍と白蓮教勢の両陣営間で繰り広げられる戦いが物語の中心となっている。よって戦いのための妖術が登場する機会のはるかに多く、そのバリエーションも豊富なのである。そこには『三遂平妖傳』以外の神怪小説からの影響もうかがえ、その代表的なものに魔力を持った武器、すなわち「寶貝」（「法寶」とも）の活躍がある。第三十八回「三敗妖魔」に見える嵇光先のさすまたや、第四十三回「三犯兗府」に見える裴月娥の紅絨套索などは、いずれも次のように武器が自ら動くことができるなど、特別な力を持って

26 白話小説以外で白蓮教が戦いのために妖術を用いたとの記述が見える例としては、『罪惟録』列伝卷三十一徐鴻儒條「儒誤りて梁山泊演義故事を信じ、梁家樓に巢く、曹州張世佩と結び、妖術を以て咒して紙人を起戦せしめ、四大金王と號す（儒誤信梁山泊演義故事、巢於梁家樓、結曹州張世佩、以妖術咒紙人起戰、號四大金王）」がある。

27 劉彥彥『明代大衆信仰与《三遂平妖傳》研究』（中国社会科学出版社、2015）166頁。

いる。

一又望天上一抛、指望下来又許參將、却被月娥一條紅絨套索飛來。那又向索來、却被索纏得緊緊的。那又是陽物、這索是陰物、原來法寶也。一本のさすまたが天に投げ上げられ、下方めがけて落ちてきて許參將を突こうとしたが、月娥の一本の紅絨套索が飛んできた。そのさすまたは索繩に撃ちかかったが、索繩にきつく締め上げられた。あちらのさすまたは陽物、こちらの索繩は陰物で、なんと法寶であったのだ。

こうした寶貝の活躍が見られる小説といえば『西遊記』や『封神演義』があり、『七曜平妖傳』もこうした先行作品中の妖術合戦に影響を受けたと考えられよう。また第六十六回「大戰鄒縣」には、沈晦が妖術によって金箍棒を手にした斉天大聖を現出するが、裴月娥は咄嗟に觀世音に変じたために斉天大聖は逃げ出すという『西遊記』の物語を受けた場面もある。

『三遂平妖傳』とのもう一つの違いは、妖力の源の説明のされ方にある。聖姑姑はもともと狐の精で、ちょっとした変化の術を身につけていたが、それが抜きん出た法力を手に入れたのは、蛋子和尚が得た天書に従って共に修練を行なったためだった。これに対して『七曜平妖傳』の白蓮道人たちが妖術を用いることができる理由はあまり説明されることがなく、あえて言うなら獣の精が転生した存在であるからということになろう。白蓮道人の部下たちも同じく獣などの転生であり、第十五回「計賺鄒縣」は彼らの来歴を縷々述べた上で次のように言う。

原都是禽獸木石畜牲、乍得人身、那通人性。所以横着膽、無所不為。

もとはどれも禽獸・木石・畜生であり、にわかに人としての体を手に入れたとはいえ、どうして人の性質に通じていようか。だから非常に大胆で、何をするにも憚ることがないのである。

一方で『七曜平妖傳』に天書故事の影が見えるのは、胡鶴齡と裴月娥の因縁に関する部分である。胡鶴齡はかつて孫臏を師匠として兵法の要諦を授かったが、その孫臏に兵法の訣を授けた水簾洞の猿こそ裴月娥の前世であったという。猿と天書の密接な関係は『三遂平妖傳』にも描かれるところであるが、途中まで反乱軍側についていた蛋子和尚が天書を得る『三遂平妖傳』に対して『七曜平妖傳』では一貫して官軍側の人物である胡鶴齡

こそが天書の後継者とされている。この違いは見逃すべきではないだろう。

このように『七曜平妖傳』中には、人々を惑わし従わせるための妖術と、戦いのための妖術とが混在している。前者は白蓮教と直接結びつく言説であるが、後者は白話小説、特に神怪小説の常套を踏襲したものである。後世の時事小説である『櫓杙間評』や『樵史通俗演義』では前者が、架空の白蓮教乱を描いた清初の小説『歸蓮夢』では後者が多く描かれており²⁸、いずれの比重が大きいか、時事小説か神怪小説かの分水嶺となるとも考えられる。『七曜平妖傳』は両方の側面を兼ね備えており、神怪小説の材料として白蓮教を取り入れた最初の作品といえるかもしれない。

三、白蓮教女性の人物像

前述のように『七曜平妖傳』は妖術について『三遂平妖傳』の影響を受けていると見られるが、女性登場人物についてもまた然りである。『三遂平妖傳』には聖姑姑と胡永兒という一組の母娘が登場し、いずれも王則の反乱に加担する。特に胡永兒はうら若い美人であり、狐の生まれ変わり、過去の因縁によって王則の後となる。彼女は泥の蠟燭に火を灯すなどの妖術の使い手で、善悪では割り切れない複雑な性格をしており、聡明で愛情深い一面を持ちながらも、最後は若い愛人を作って天誅を受けたかのように死んでいく。こうした妖術を操る美女という形象は、『七曜平妖傳』中で著しい存在感を示す白蓮教出身の二人の女性、裴月娥と周如玉に継承されている。特に、周如玉については胡永兒の生まれ変わりであると、明記されている。

周如玉はもともと白蓮教徒の父を持ち、自身も教門に属していたが、のちに討伐軍の将軍である許定國と結婚して官側に寝返り、その妖術の腕前を発揮して乱の平定に貢献する。第五十一回「月娥考鬼」ではその前世が次のように語られる。

他是驪山老母侍女、一轉胡永兒、再轉紅羅女、今生周如玉、仍歸許氏妻、不得有誤。

28 『歸蓮夢』については拙稿「蘇庵主人『歸蓮夢』における「白蓮教」」(『日本中國學會報』第六十六集、2014) 参照。

彼女は驪山老母の侍女であり、はじめ転生して胡永兒となり、再び転生して紅羅女となり、今生では周如玉となって、やはり許氏の妻となることに相違ない。

ここには胡永兒と並列されて二つの女性名が登場する。驪山老母は、宋朱子『陰符經考異』によれば、驪山で唐の李筌に『黄帝陰符經』の奥義を説いた女仙とされる。同音の「黎山老母」はしばしば小説中に登場し、たとえば『西遊記』第二十三回では三人の美少女を伴った婦人に化けて唐僧たちを試す。『七曜平妖傳』では周如玉は夢の中で驪山老母から法術の教えを受けるのであって、驪山老母の侍女とは恐らくは女弟子の謂であろう²⁹。なお周如玉の法術の師匠として、明末以降の白蓮教の信仰対象である無生老母ではなく、この驪山老母が名指されることはやや不可思議であるが、これが作者の白蓮教教義への無知または無関心を示しているのか、あるいは単に文学作品に登場するに相応しい存在かを慮った結果なのかは俄には判断できない。いっぽう紅羅女は『中州人物考』巻四「曹中丞鳳附孫尚書亨」に名が見え、嘉靖乙未（十四年）の進士である曹亨が刑部主事に任じられて兗州の守備に当たった時、「紅羅女という者有るに會す。妖術を以て衆を惑わし、數萬人に至る。官兵敢えて其の鋒に撓る莫し」という³⁰。また『明詩綜』巻四十八には周沛「紅羅女」と題する次のような作品が収録されている。

山東之賊紅羅女、用兵迅疾如風雨。白蓮授術成妖精、能令照鏡生公卿。海内承平日已久、乍見干戈皆却走。驅馳費盡中丞心、羽書未報收刁斗。紅羅女、爾非男子身、蛾眉粉黛當青春。跨馬彎弓無可樂、何用風塵來殺人。山間小民饑餓苦、日辦官需夜猛虎。貧賤那堪更亂離、慎勿橫行到吾土。

山東の賊紅羅女、用兵の迅疾なること風雨の如し。白蓮授術して妖精と成し、能く照鏡せしめて公卿を生ぜしむ。海内承平して日已に久し

29 乾隆年間序の如蓮居士『薛丁山征西』では黎山老母が女将樊梨花に法術を伝授したうえ結婚を予言しており、『七曜平妖傳』中の役割と甚だ類似している。

30 「會有紅羅女者、以妖術惑衆、至數萬人、官兵莫敢撓其鋒。」やや後の『河南通史』巻六十汝寧府明曹亨條にも同じ内容の記事が見える。

く、乍ち干戈を見て皆却走す。驅馳して中丞の心を費盡し、羽書未だ刁斗を収むるを報ぜず。紅羅女、爾は男子の身に非ず。蛾眉粉黛青春に当たり、跨馬彎弓楽しむべき無し、何ぞ風塵を用いて來たりて人を殺さん。山間の小民饑餓苦しく、日は官需に辦め夜は猛虎あり。貧賤那ぞ更に亂離するに堪へんや、慎んで横行して吾土に到る勿かれ。

ここには「白蓮」の文字が見え、その具体的な内容として「能令照鏡生公卿」、すなわち前節で述べた水盆の術に類似した妖術の行使が言われている。『明詩綜』によれば周沛は字を允大といい紹興山陰の人である。同郷の徐渭（1521—1593）の作品に「哀周鄭州沛二首」があることから徐渭と同時代の人と思われる³¹。この「紅羅女」と『七曜平妖傳』が共に山東に割拠する白蓮教の女性に対する文学的想像を作品化していること、また当該女性の造型に有意な類似が見られることは注目に値する。というのも、詩中に現れる若く美しく武芸にすぐれた女将のイメージと同様に、『七曜平妖傳』の周如玉や裴月娥も反乱軍の成員となって戦う若く美しい女将として描かれている。

とりわけ裴月娥の結婚にまつわるエピソードは白話小説中の女将像との根本的な符合を示している。

裴月娥は周如玉と同じく白蓮教徒の娘であるが、周如玉よりも早い時期に許定國を陣中で見初めて結婚、以後は父と共に官軍側につき、積極的に白蓮教討伐にあたる。その許定國との出会いは、第三十回「二犯兗府」に次のように描かれている。

月娥心中十分看上許參將。手段又高、人品又好、又應石碑上星君。…許參將吊下馬、月娥又下馬扶他上了馬、自己下馬曰「你将我拏了去、做你今日功勞。俺一片真心為你、妖衆許多妖術、非我父子助、你不能成功。」許參將感他兩次相救之情、不殺之義、曰「也罷、俺便依你、只要你真心為國。」月娥曰「你是俺丈夫、俺不依你、不嫁你了。」

月娥は心中たいへん許參將を気に入った。腕前は大したもので、人品も優れており、そのうえ石碑に書かれた星君にちょうど合っている。

…許參將が馬からずり落ちかけると、月娥はまた馬から下りて彼を

31 『徐文長三集』卷六所収。

助けて馬に乗せてやり、自分は馬から下りて言った。「私を捕まえて連れて行き、今日の手柄に下さい。誠心から言うのですが、(筆者注：白蓮教の)妖衆はいくつもの妖術をわきまえていて、私たち父子の助けがなければあなたは成功できません。」許参将は彼女が二度も救ってくれた恩と、殺さないでくれた情に感じて言った。「ではそうしよう、私はあなたの言う通りにしよう。ただあなたが我が国のために誠心を尽くしてくれるなら。」月娥は言った。「あなたは私の夫です。言うことを聞かないくらいなら、結婚したりしません。」

この場面は『楊家将演義』などに出てくる、男性と女性が陣中での戦いを経て結婚するという、いわゆる陣中比武招親の話柄に沿っている³²。裴月娥が女性でありながら積極的に結婚を申し込み、武術の腕によって伴侶の男性の命を救ったり功績を立てさせたりするのは、こうした話柄と全く同様なのである。また前述のように裴月娥は紅絨套索を自らの武器としているが、これは『水滸傳』第五十五回で女将扈三娘が用いる二十四の金鉤のついた投げ縄の名「紅錦套索」とよく似ているし、『三寶太監西洋記』第八十一回でも同じく女将の百夫人が八十一の金鉤のついた「紅綿套索」を使用しており、ここにも先行作品中の女将像からの影響が窺える。

このように、裴月娥と周如玉は胡永兒を強く意識しながらも、他の既存の伝承や文学作品に現れる女性形象と結びついて成立した人物である。興味深いのは、『七曜平妖傳』には白蓮教の女性とされる紅羅女の名前は出てくるのに、同じく歴史上の白蓮教の女性として知られる唐賽兒の名が出てこないことである。白蓮教に代表される民間教門で女性が大きな役割を果たしていたことは、つとに指摘され³³、反乱の際にもしばしば女性指導者が登場する。そのうち殊に有名なのが永樂年間の唐賽兒である。妖術を操り「佛母」を名乗って山東地方に信徒を増やし、反乱を起こしたが遂に

32 松浦智子「『楊家将演義』における比武招親について」(『中国文学研究』第三十一期、2005)、大塚秀高「西王母の娘たち―「遇仙」から「陣前比武招親」へ―」(『日本アジア研究』第八号、2011) 参照。

33 喻青松『明清白蓮教研究』所収「明清時期民間秘密宗教中的女性」(四川人民出版社、1987) 参照。

捕えられなかった唐賽児の事蹟はまず『明實録』に記され、その後少なからぬ野史や筆記にも取り上げられ、『初刻拍案驚奇』巻三十一や呂熊『女仙外史』で小説化までされている³⁴。このように知名度においてずば抜けた唐賽児がしばしば他の文学作品中の白蓮教の女性のモデルとされていたことは、乾隆年間の『曲海總目提要』で白蓮教の女性が登場する明清代の二作の戯曲いづれについても唐賽児からの影響を指摘されていることから窺い知れる³⁵。ところが『七曜平妖傳』は唐賽児の事件と同じく明代の山東地方で起きた反乱を扱いながら唐賽児には一切言及しておらず、却って他の女性の形象に当てはめたり、名を引用したりしている。これは白蓮教の女性の形象に、従来言われてきたよりも豊富な原型が存在したことの証左と考えられる。

なお白蓮教の女性が善悪の二面性を併せ持って描かれることは、裴月娥と周如玉の受ける「解冤呪」に象徴される。すなわち第七十一回「兩師齋醮」には、全ての戦いが終結した後に道士が「解冤呪」を唱えて二人の災障を祓う場面がある。これは彼女たちが結婚によって名実ともに白蓮教から離れてもなお、その出身のために自力では自身の内包する邪惡と訣別できないことを示している。この二面性は後世の小説にも継承され、清代の小説『聊齋志異』巻三「小二」や前掲『歸蓮夢』の女主人公にもその要素が見られる。以上のように、白蓮教の女性の形象の成立過程についても、『七曜平妖傳』は示唆するところが多いのである。

四、白蓮教の集会と不義密通

『七曜平妖傳』には白蓮教が男女混合の集会を開いたり、そこで不義密通が行なわれたりする様子が登場するが、これは白蓮教を描いた作品につきものの場面である。

34 唐賽児故事の演変については巫仁恕「「妖婦」乎? 「女仙」乎?: 論唐賽児在明清時期的形象」(呂芳上主編『無聲之聲(Ⅰ): 近代中國的婦女與國家(1600—1950)』、中央研究院近代史研究所、2003) 参照。

35 拙稿「明清戯曲における白蓮教女頭目の描かれ方 —「女拐男」話柄を手がかりに」(『中国俗文学研究』第二十三号、2015)、78・79 頁参照。

まず第十二回「董子強婚」は反乱の起きるきっかけを描いた回であるが、その経緯は以下のようなものである。滕県の近くの独角村で、尚書の息子董一経にかねてから娘を結婚相手として要求されていた白蓮教主の周臣は、徐洪儒からの要請を受け、自らが開いた「榴花會」に乗じて弟子達とともに滕県に攻め込むに至る。董一経のモデルは『明史』卷二九〇「姬文允傳」に滕県白蓮反乱の禍の根源として見える董二すなわち延綏巡撫董国光の子であろう。ただし「姬文允傳」では滕県城に迫った徐鴻儒に九割もの民が従ったのは董二の横暴のせいだったという時系列になっており、榴花会のこともし出てこない。小説によれば、この榴花会とは六、七千人の男女を集めて食事を振る舞ったうえ、「五部六冊」についてのでたらめな説法を聞かせる内容だという。五部六冊とは言うまでもなく、羅祖（嘉靖六年没）が編纂したといわれる無為教の經典である。羅祖自身の教説は禪宗の影響を受けたものであったが、徐々に内容が変化し、万暦年間には既に取締の対象となっていた³⁶。集会については『三遂平妖傳』第十一回にも聖姑姑が祈祷の道場「無遮大會」を開くことが見え、その内容はやはり訪れる人々に齋食を施し、聖姑姑みずから妙善公主や目連の故事を語って聞かせるというものである。聖姑姑の無遮大会が直ちに反乱につながることはないが、『隋書』卷二十三には弥勒出世を自称して遠近の人々を惑わした宋子賢が「無遮佛會」に乗じて挙兵を謀り、事が洩れて誅されたとの事件が記録される。講經などで群衆が集まることは、明末においても官憲の強く警戒するところであり、たとえば『明實錄』万暦四十八年五月乙巳條は日常的に民間教門の集会が行なわれていることを述べ、元末紅巾の乱の首謀者を引き合いに出して、このままでは反乱が起りかねないことを懸念する³⁷。『七曜平妖傳』の集会の描写はこうした当時の状況を踏まえ、五部六冊など直近の語彙を取り入れつつ書かれたものと思われる。

36 『明實錄』万暦四十八年五月乙巳「白蓮、無為等教、已兩經臣部具題、嚴禁驅逐。」無為教については澤田瑞穂「羅祖の無為教」（『増補寶卷の研究』、國書刊行会、昭和50）参照。

37 「四方各省教首、謬稱佛祖、羅致門徒、甚至皇都重地輒敢圍坐談經、十百成群、環觀聚聽…歸附愈多、勢焰愈熾、未必無劉福通。」

さらに第十六回「偽盜劫費」では、こうした集会の場が男女の密通の温床となることが語られる。費県近くの山中に萬余の徒衆が招集され、白蓮道人である呉理が法台に上って講經說法を行なうが、その会合が「男女不分、混在一處」であったことから以下のような不義が起こってしまう。第一に紅をさし白粉をつけた（「搽胭抹粉」）婦女と若者が、体が触れ合うような距離に混在し、說法も聞かずに目配せをし合う。第二に三本腕の道人（「三隻手的道人」）というのがいて、片手をこっそり懷から伸ばして席上の婦女の体を触る。第三に密偈を授ける師傅というのがいて、若い婦人を見ては密偈の伝授を口実に逢引の約束を秘かに取り付け、心得た婦人は夜半に師傅のもとに赴いて共寝をする。小説はこうした例を紹介した後、「この集会の悪い所は多すぎて話しきれない」とまとめている³⁸。こうした男女関係にまつわる醜聞は一貫して白蓮教に付いて回っていた。そもそも白蓮教の源流とされる南宋茅子元の白蓮宗は「教団の指導者が半僧半俗の妻帯者であった点に特徴が見られ」、「広汎な大衆への布教をめざしたから、信者に男女の区別を立てないのは当然であったが、既成教団や官僚は、この点を指して白雲宗・白蓮宗を不倫・淫猥の集団であるかの如くに非難」したという³⁹。男女同修の伝統が後世にも受け継がれたことは、明末の大乗円頓教の經典『古佛天真考証龍華寶經』卷二十一に「男と女が共に会するよう言いつける、おまえたちがあちらとこちらに分かれる必要はない」とあることから見てとれる⁴⁰。『七曜平妖傳』を筆頭とした白話小説やその他の筆記類はまさにこうした面に注目し、作品に取り入れた。以下その類の記述を挙げ、こうした話題がどのような発展を見たのかを検討していく。

明崇禎十七年の作と推定される佚名撰『檮杌閒評』は明末の動乱を描いた時事小説であるが、その第二十四回では天啓二年の正月に山東省の「混同無為教」の家系である劉鴻儒という人物が、「法華妙品真經」を講じ阿

38 「這上會的壞處多得緊也說不盡。」

39 鈴木中正『中国史における革命と宗教』（東京大学出版会、1974）51・52頁。

40 「吩咐合會男和女、不必你們分彼此。」この經典に関しては、民国期の刊本が早稲田大学古典籍総合データベースで閲覧できる。

弥陀仏に祈祷する内容の集会を開く。そこにやってきた一人の若い女性に、劉鴻儒の仲間である王支和尚は次のように説く。

你我雖分男女、在俗眼中看若有分別、以天眼看來總是一個、原無分別。... 況我等這教何以謂之混同無為、只為無物無我、不分男女、人物貴賤賢愚、總皆混同一樣。

私とあなたは男女の別があり、俗な目で見れば異なっているようだが、天の目から見れば結局同じで、もともと区別はない。... とりわけ我々のこの教えをなぜ混同無為と呼ぶかといえば、ただ無物無我であり、男女を分かつたず、人の身分の高低や賢愚にかかわらず、みな一様に混じり合うためである。

すなわち混同無為教の中心的な教えの一つは男女を区別せず混じり合わせることだというのである。また清の順治・康熙年間成立と見られる江左樵子『樵史通俗演義』は明末を舞台とする時事小説であるが、その第四回に、以下のような記述がある。

咱這教門裡人也衆、錢糧也多。凡入了這教、再不分你我了、東西大家吃、衣服大家穿、銀錢大家用、就是漢子老婆也大家可以輪流換轉、不像常人。這樣認真、故此叫做白蓮教、又叫無碍教。說受一位聖賢的古人、喚做李卓吾、他在湖廣麻城縣一帶地方開這教門起的。

私たちの教門は人も多く、金銭や食糧もたっぷりある。この教門に入った人は誰でも、自分と他人のものを区別せず、食べ物は皆で食べ、衣服は皆で着て、金銭は皆で使い、夫や妻さえも皆で順々に交換してよく、常人とは異なる。このように真面目なので、そのため白蓮教といい、また無碍教という。一人の聖賢なる古人、その名を李卓吾といい、彼は湖広麻城県一帯でこの教門を開いたのだ。

ここでは白蓮教または無碍教と呼ばれる教門が、その内部であらゆる所有物を共有するという一種の理想主義が語られているが、話の眼目は「輪流換轉」の部分に「此段宜着化、便知白蓮教根脚」という傍注が付いて強調されていることから分かるように、白蓮教における夫婦の交換にある。この教えを説くのは鄆城県の妖女丁寡婦とその右腕の徐鴻儒であるが、前述の劉鴻儒同様に史実上の徐鴻儒をモデルにしており、この名が白蓮教と結

びついて相当知られていたことが分かる。なお『樵史通俗演義』で教門の開祖として言及される李卓吾は言うまでもなく実在する晩明の思想家であるが、彼にまつわる同様の言説は清の雍正年間成立と推測される佚名『梧桐影』という白話小説の第三回にも見られ、ここでも李卓吾が湖広麻城で「男女無礙教」なる教門を設けたとされる。李卓吾が好色であると喧伝し糾弾することは、万暦三十年閏二月に上奏された弾劾文「よからぬ輩と尼寺に遊び、妓女といっしょに白晝入浴し、士人の妻女を誘惑しては、尼寺に入って法を講じている。なかにはふとんをたずさえて寝泊まりするものまであらわれ、麻城の一境は狂ったようになっている」に既に見えるが⁴¹、これに名づけて邪淫を広める一つの教門とするのは如何にも荒唐無稽であり、『樵史通俗演義』に至っては徐鴻儒の「白蓮教」と直接結びつけているのはさらに不可思議である。

白蓮教において助長される性的な不道徳をめぐる以上のような記述のうち、どこまでが事実に基づいており、またどこまでが想像の産物や中傷に過ぎないかを知ることは、現存する資料の有限さやその性質から困難である。ただその背後に、いわゆる民間の道教やその他の邪教にまつわる言説の影響があることは確かだろう。たとえば夫婦交換に関しては古く北周の甄鸞『笑道論』が、道教では男女が美醜や好悪にかかわらず順に相手を交換して気を修練することを非難している⁴²。また元末の野史『庚申外史』によると、至正十三年に皇帝が哈麻という役人の推薦した「西天僧」に従い「演揲兒」法を修得せんとしたところ、皇帝の前で男女が裸になり、あるいは君臣が寝台を共にして、そのうえ互いに妻を譲り合うことを約束したが、これを「些郎兀該」、中華の言葉で「事事無碍」といったという⁴³。

41 顧炎武『日知錄』卷十八李贄、「與無良輩遊庵院、挾妓女白晝同浴、勾引士人妻女、入庵講法。至有攜衾枕而宿者、一境如狂。」訳文は大木康『明末江南の出版文化』（研文出版、2004）130頁より引用。溝口雄三『李卓吾 正統を歩む異端』（集英社、1995）は、この弾劾の火種となったのは麻城の士人の娘・梅澹然が書状を通じて李卓吾に師事していたことであると指摘する。

42 『大正藏』史伝部『廣弘明集』卷九「笑道論」卷下・道士合氣三十五「道律云、行氣以次、不得任意排醜近好、抄截越次。…教夫易婦、惟色為初。父兄立前不知羞恥、自稱中氣真術。」

43 「在帝前男女裸居、或君臣共被、且為約相讓以室、名曰些郎兀該、華言事事無碍。」

このほか万暦年間の筆記『雲間据目抄』巻二「記風俗」で教門の流行により男女が混合して「摩臍過氣之説」を唱えたとか、崇禎年間の短篇白話小説集『初刻拍案驚奇』巻三十四で遊僧が「採戦伸縮之術」を習得し婦女を集めて姦通したとかの記載は、いずれも白蓮教の名で呼ばれているが、その実書かれている内容は道教由来の房中術である。

以上のように、白蓮教は男女同修の伝統を持つことから、その内部での不義密通が好奇心をもって詮索され、あたかも主要な教義の一つであるかのように書かれることもしばしばであった。特に時事小説においては徐鴻儒や李卓吾といった実在の有名な人物を引き合いに出しながらその不道德さが語られるが、『七曜平妖傳』はその早期の例であり、こうした部分は本作品の時事小説的な面を反映しているといえる。

おわりに

管見では、明末清初期に実際に起こったの反乱事件を「白蓮教」と銘打ち、しかもそれを主要内容とした長編小説として、『七曜平妖傳』は唯一無二の存在である。その内容は戦いのための妖術や白蓮教の女性の形象においては白話小説の常套に影響されたところが大きいが、いっぽうで人を惑わすための妖術や集会と不義密通に関しては白蓮教にまつわる当時の言説をそのまま反映した部分もあり、特に後者は白蓮教という宗教的異端に対する人々の興味の在りかを物語っており興味深い。白蓮教には、世間に名前は知られているものの、その定義は実は曖昧であったという面がある。『七曜平妖傳』の作者沈會極はこうした面を利用し、明確な形をなさない恐れや好奇心を託して、きわめて常套的な神怪小説を作り上げようと試みたのである。異端と妖術をめぐるこうした物語の背後にあるものについて、今後は地域や時代との関係も考慮に入れながら、他の文学作品にも広く目を配って研究を進めていきたい。